

# ジョン・バートンの一生とその學說

眞 實 一 男

## 目 次

- I はしがき
- II バートンの一生
- III バートンの學說
- IV むすび

## I

ジョン・バートン (John Barton) と云つても、ひとはおそらく首をかしげてそれはいつたい誰のことなのだろうかと思ふかもしれない。それはおそらく、ギヤスケル夫人の名作「メアリー・バートン」のなかにでくる悲劇的運命を背負わされたかの女の父親ジョンのことかもしれないと考えるひともあるう。經濟學史の上で、かれがマイナーネームであることは疑いの余地がない。リスマス・リカアドウ・マルサスなどの古典學派の巨星たちにくらべればかれはせいぜいリカアドウをとりまく小さな星の一つでしかない。かつてスミス生誕二百年祭に捧げられたこの国の色々な行事をふりかえるにつけても、<sup>1)</sup> バートンの百年忌であつた昨年には、特集号はおろか、かれについてかゝれた一篇の論文すらもなかつたということは心淋しい思いであつた。外国においても筆者がしるかぎりにおいては、わ

ずかにソテイロフ<sup>3)</sup>がかれの百年忌のための一論を発表しているだけのである。もつともこの論文は、バートン研究という点よりすればエボックタイキングな貢献であつて、いままでにしられていなかつたかれの生年没年がこれによつて初めてあきらかにされたのみならず、完全なるかれの著作目録も確定されるという大きな收穫をもたらした。筆者も一年おくれになつてしまつたけれども、この小論をバートンの百年忌に捧げたい気持である。たゞし以下にみられるように、原資料の不足からソテイロフの論文に依拠する部分が多量にも多い点をあらかじめお断りしておきたい。

(1) これまでの我国の経済学関係の諸事典のなかでは、バートンという項目は全くみだされない(今度平凡社より出版を予定されている「経済学事典」には、バートンが独立の一項目として含まれるもようであるけれども)。

外国の経済学関係の諸事典においても、わずかに次の二つに名前がみられるにすぎない(有名な Dictionary of National Biography<sup>4)</sup>と、かれの名前はなう)。(1) Dictionary of Political Economy, 3 vols. London 1894-96. Vol. I. Pp. 122-123. (2) Encyclopedia of Social Sciences, 15 vols. New York 1930-35, vol. I. P. 472.

このうち前者は編集者の名前をとつてつぎうに Palgrave's Dictionary of Political Economy といわれるものであるが、そこでバートンの項目を執筆してゐるのは H. R. T. (H. R. Tedder) である。たゞその本文たるやたゞの二行にすぎず、「スタウトン (Stoughton) 出身、いくつかの賢明ではあるがしかし不健全なパンフレットの著者」として片付けられている(そのあとに、後述註5における「諸觀察」、「研究」、「穀物法」の三書が文獻としてあげられているが、全部を通算しても一二行にしかならない)。もつともこの事典の新版 (New edition, edited by H. Higgs, 1925-26) では、H. R. T. による本文はそのまゝにして、第一巻の後部に附せられた Appendix, P. 822 に、S. B. (Dr. Stephan Bauer) による追加記入が行われた。そこでバートンがその後いかに取上げられたかが問題とされ、よくしられてゐるリカアドウの「原理」、第三章脚註における指摘を掲げると共に、マルサス、マルクス、ヴィレルヌ (Villermé) による引用箇所を示している。

後者は W. H. Dawson によつて執筆され、かれの主著「諸觀察」の主張を取上げると共に、これに対するリカアドウ、マルサス、マカロツクの取上げ方を紹介し、かれの貢献をば、「これらの批判にもかゝらず、バートンは労働需要をまかなう資本の部分は総資本の諸変動とは独立して交酬しようという觀念に対して一般的な承認を確保した」点に認める。この後者に対して

後述註3のソティロフは、これはその外については申分のない論稿なのであるが、かれのペンフレットたゞ一つだけしか問題にしていないこと、文献参照もわずかに二つしかなされていないこと、およびかれの生年没年が不明とかゝれてあることの三つの点を難じている。

なおバートンがその後取上げられる場合にはかれの「機械論」の部分(Obserations, PP. 15—17; Hollanders reprint, P. P. 16—18.)がその中心をなしていることは疑えないところである(上記ヴァイレムはこの例外をなす)。そうしてその点に關しては、小稿「バートンおよびリカドウの機械論について(一)」(経営と経済、第五九号、一九一二頁)における(註一)を参照して戴きたいが、その数とても決して多いとはいえないようである。

(2) 一九二三年(大正一二年)におけるスミス生誕二〇〇年には、いろいろな所でいろいろな催し(たとえば記念講演会、文書展示会など)がなされた。特にその年から翌年の一三年にかけて、経済關係の諸雜誌に特集号の企画が続出した。その主なるものをあげれば、(一)経済学論集、(旧卷)第二卷第一号(二)商学研究、第三卷第一号(三)三田学会雜誌、第一七卷第七号(四)経済論叢、第一八卷第一号などがある。

(3) George D. Sotirop (1910—) は、一九四七年以降国連に勤務する経済学者である。ブルガリアのソフィヤに生れ、ソフィヤ大学、スイスのフリーブル(Fribourg) 大学に学び、一九三六—四〇年には国際連盟の研究助手、国連につとめるまでは国際赤十字の経済専門家であつた。著書には (1) Evaluations et théorie du revenu national, Paris 1945. (2) Ricardo und Sismondi, eine aktuelle Auseinandersetzung über Nachkriegswirtschaft vor 120 Jahren, Zurich 1945. があるが、むしろシモンディの「経済学新原理」(第三版) [J. C. L. Sismonde de Sismondi: Nouveau principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population, 3. éd. Geneva 1951.] の編集者として著名であり、シスモンディ研究の新しい權威である。

(cf. Who's who in the United Nations, New York 1951. P. 410.)

(4) G. Sotirop: John Barton (1789—1852). Economic Journal, March 1952. PP. 87—102.

(5) 上掲論文の Appendix (P. 102) に示されているかれの完全なる著作目録をフルネームであげれば次のようになる。

#### Complete List of John Barton's Writings

##### (a) Economic Writings

- (1) Observations on the Circumstances which Influence the Condition of the Labouring Classes of Society, London, 1817, 88PP.
- (2) Inquiry into the Causes of the progressive Depredation of Agricultural Labour in Modern Times, with Suggestions for its Remedy, London, 1820, 128PP.
- (3) A Statement of the Consequences likely to Enstue from our growing Excess of Population, if not Remedied by Colonization, London, 1830, 48PP.
- (4) An Inquiry into the Expediency of the Existing Restrictions on the Importation of Foreign Corn, with Observations on the present Social and Political Prospects of Great Britain, London, 1833, 128PP.
- (5) The Influence of the Price of Corn on the Rate of Morality, Chichester, 1844, 16PP.
- (6) The Monetary Crisis of 1847, Prediction and Counter-Prediction, Chichester, 1847, 12PP.

(b) Other Writings

- (7) A Lecture on the Geography of Plants, London, 1827, 94PP.
- (8) "A Summer's Evening at Stoughton," in Chichester Magazine, No. 2, 1838.
- (9) "A Winter's Evening at Stoughton," in Chichester Magazine, No. 2, 1838.

われわれは第三節においてかれの経済学的諸著作を取扱うが、簡単なためにソテイロフにない第一書より順次に、「諸觀察」「研究」「人口超過」「穀物法」「死亡率」「一八四七年の貨幣恐慌」という畧称を用いることにしたい。ちなみにこのうち主著とみなされるものは第一書とあり、マカロツク以来主としてあげられるものは、第一書、第二書および第四書の三冊である。

(cf.) R. McCulloch: The Literature of Political Economy: A Classified Catalogue of Select Publications in the Different Departments of that Science, with Historical, Critical, and Biographical Notices, London 1845, P. 286, PP. 287-288, and P. 79.)

II (9)

バートンは一九世紀初頭から中頃にかけてのイギリスの経済学者である。しかしその国の経済学者がしばしばそうであつたように、かれもまた言葉通りの意味においては専門の経済の学者ではなかつた。サセックス(Sussex)州に

あつたかれの地所によつて、かれは生計にことかゝない地方の名士 (country gentleman) の一人であつた。かれは自分の余暇を社会科学 (別して経済学) と植物學とに等分に捧げた。かれの性格は子供のようにかざり氣がなく、しかも確固とした自立の人であつた。またはつきりとは分らないが、かなり高度の教育をうけたらしく、かれはフランス語、ドイツ語の外にラテン語をもよくした。かれの教養は広く、ペイコン、ベンタム、ホツプス、ヒューム、ロツク、ミルトンの如き作家たちに通じていた。かれの心情はやさしかつたが、かれの思考には「數理的に明証するような氣質」 (mathematically demonstrative turn of mind) のがあつた。かれは外国にも旅をしつゝ (フランス南部、イタリートの各地を訪れ、ドイツ、ポーランド、ロシアにはいつたかもしれないと思われるふしがある。なおこれらの旅行は一八二七年以前になされたものゝようである)。かれは自分の兄弟 (Bernard) や姉妹 (Maria) によつて敬愛され、たとえばチャールス・ラム (Charles Lamb, 1775—1834) やエドワード・フイツゲラルド (Edward Fitzgerald, 1809—1883) のような当代の文人とも面識があつた。要するにかれは、こう外に引きこもつた知識層として誰にもわすれられずに自分の氣のむくまゝに思索した賢者であつた。そうしてまたそこにかれが時流にまどわされることなく特異な學説を打建てることができたという利點が生じたと共に、かれの所説が忘却のうちに葬りさられたという素地の一つがみいだされるように思われる。

かれは、一七八九年七月一日ロンドンのサウスウアーク (Southwark) に、クエカーを両親として生れた。かれの父はかれの生れる二ヶ月前に死去したので、かれは母方の祖母の別荘のあるトツテナム (Tottenham) で育てられた。一八一一年アン・ウツドラウフ・スミス (Ann Woodroffe Smith) というクエーカーの一少女と結婚した (この時の結婚登記には、サセツクス州のチチスター (Chichester) の商人と記人されている)。アンの死後、ルイス (Lewis) 出のフランセス・リツクマン (Frances Rickman) と再婚して、六人の子供をもうけた。一八二〇年には (チチスター) 貯蓄銀行の管理者 (trustee) を七年間にわたつてつとめていたよしである。かれは、一八五二年五月一〇日チチスターにおいて六二才で他界しているが、当時のゼントルマンズ・マガジンにあらわれた死亡広告には、「チチスター貯蓄銀行、ランカスター学校 (the Lankastarian School) 』それが哲學協會 (the Philosophical Society) に

合併されるまでかれがその会計であつたところの職工協会(The Mechanics' Institution)の最初から企画者の一人であつた。多年の間、かれはその壁の内側において有能でしかも評判のよいやり方で講義した。<sup>9)</sup>とかゝれている。

六二年の一生の間、かれは折にふれて当時のやかましき経済問題について思索し、かれ一流の鋭い分析を示したパンフレットをそのつど出版したが、当時の経済学の本流にたちまじることが決してなかつた。

(6) この節は、大体において上掲のソテイロフの論文のIおよびII (PP. 87—89) を、わたくしなりに順序をかえて、紹介したものである。よつて厳密なる引用部分を除き、いちいち原文のページ数をあげなかつた。

(7) G. Sotiroff: *ibid.* p. 88

(8) *ibid.* P. 89.

### III

学説史上のバートンは何よりもまず、リカアドウがかれの「政治経済学原理」第三版(一八二一年)に新しく附加した「機械論」の先駆者として位置づけられる。バートンの「機械論」がリカアドウの「機械論」のたんなる先駆者に止りそれ以上の何物でもなかつたかいなかについては、筆者が他の機会に詳論したところであつたが、機械の導入と労働需要との関係を取扱ういわゆる「機械論」が、バートン・リカアドウの「機械論」として経済学のその後の発展に大きな役割を果たしてきたことについては、何人も異論をさしはさまないように思われる。

かゝる「機械論」を最初に手をつけたものが、かれの第一のパンフレットでありまた同時にかれの主著ともなつた「諸觀察」(一八一七年)であつた。そこでのかれの設問は、そもそも労働需要を規定するものは何であるかということであり、それに対するかれの答は、それは総資本ではなくしてそのうちの流動資本であるというのであつた。この見解はバートン独自のものであり、その当時の支配的学説(例えば、スミス・改説前のリカアドウ)と鋭く対立する異端的なものであつた。<sup>10)</sup>もともと「諸觀察」執筆の直接の動機となつた「救貧法委員会の報告」<sup>11)</sup>における意見も、その点に関する限り支配的学説の線に忠実に添うものではなかつた。そうしてそれらによれば、労働需要を規制す

るものは総資本（流動、固定の両資本を含む）であり、従つて資本にして増加しないとなれば労働需要の増加は望めず、救貧法による救済は雇傭さるべき他の労働者たちのギセイにおいてなされざるをえないから結局のところ労働階級を悪しき状態におとしめらしめるにすぎないとした。これに対するバートンの反論は、次の二点よりなされる。その一つは歴史的、統計的実証であり、その二つは——そうしてこれがその後の「機械論」の主軸をなすのであるが——抽象的推理である。前者によれば、たとえば一九世紀初頭における資本（富）の蓄積増加はその前世紀に比して一〇倍にみたなかつたのに反して、人口の増進はあきらかに一〇倍以上となつており、従つてこの両者はかならずしも適合しないことが証明されることになる。<sup>1)</sup>次に後者によれば、かの有名な数字的設例にもとづき、二倍の資本増加が逆に雇傭の $\frac{1}{2}$ の減少をもたらすことが立証される。数字的設例を含む三つのパラグラフおよびその結論をしめくゝる一つのパラグラフにおいて<sup>2)</sup>かれが確立した結論は、次の三点に要約される。すなわち第一に、労働需要は流動資本によつて規制され固定資本とは無縁であること、従つて流動、固定両資本の合計である総資本によつて規定されるものではないということ、第二に機械の導入は、総資本の増加にもかゝらず、流動資本の固定資本化を伴うことによつて労働需要の減少をきたしうること、第三に労働需要が総資本によつて規定されるのは、総資本中における流動、固定両資本の構成比率が同一に止るという特殊でしかも非現実的な場合にのみ限られるということであつた。殊にこの第二点がその後の「機械論」の中心テーマとなつたのであるが、前述の如くマズリカブドウによつて取上げられてからは、学説史的にてはラムジイ (G. Ramsay)、ジョーンズ (R. Jones) を経て、マルクスの産業予備軍の理論に結実すると共に、近時の労働節約的機械導入にもとづく技術的失業理論 (Theory of technological unemployment) の源流をなすものとみなされる。<sup>3)</sup>このようにみられるとき、バートンに現代的長期失業理論の源流としての名譽を与えることはあながち失当ではないように思われる。

およそある人の学説を評価せんとすれば、少くともその人の著作全部が利用されなければならず、殊に経済学者の場合においてはその経済関係の全著作の参照は許されうる最低限の条件でなければならぬ。しかし我国においてはバートンの他のパンフレット（第二書より第六書まで）は現在のところ入手困難であり、また近く入手可能とも思わ

れない。よつて極めて危険であると思われるけれども、以下においては主としてソテイロフの上掲論文におけるそれらの要約を紹介検討することによつて不満足ながらギャップをうめるといふ方針をとらざるをえなかつた。<sup>14)</sup>

まず「死亡率」(一八四四年)および「一八四七年の貨幣恐慌」(一八四七年)は、ソテイロフのように、バートンの著作中比較的重要性の乏しいものであり、<sup>15)</sup>またそのページ数もきわめて少ないものゝようであるから、以下においてはこの両書に対する言及を全く割愛して、「諸觀察」以外の三書(第二書より第四書まで)のみを取上げることにした。

第二書「研究」(一八二〇年)は、少くともバートン自身の考えによれば、「諸觀察」の主張を新しき装いをもつて再提出することであつた。もつとも両者の間に原理的変更はあまりみられなかつた。その三年間になされた一層の研究と反省とによつていくらかのささいな変更はあつたとしても、貫かるべき諸原理は両書において同一といつてよかつたからである。従つて新しき装いの重点はもつぱら、よりなじみやすい、より一般的な敘述形式の採用と当時のやかましき實際問題への直接の言及とに指向された。そのさいかれの意味する實際問題とは、ナポレオン戦争後(一八一五年)の不況によつて前面におしだされた農業における貧窮化の増大という事実であり、それに対するかれの接近は主として農業賃銀の下落という観点よりなされる。いまそれらに対するかれの主張をソテイロフにならつて要約すれば、次の四点となる。すなわち、「(a)賃銀の下落は、マルサスによつて論ぜられてゐるようには、救貧法的作用によるものではなかつた。<sup>16)</sup>貧民のくるしみは、死亡率の低下によつて証明されるようには、労働の価値低下と歩調を合わせなかつた。(c)死亡率の低下は、急速なる人口増加をひき起した。(d)農業賃銀を押下げたところの、人口成長よりもつと強力な要因は、新世界からヨーロッパの諸市場にもたらされた貴金屬の豊富な供給に端を発する、製造品に対する需要の増加であつた。この需要は、製造諸企業の利潤を引上げることによつて、資本をば農業より引上げて製造業へともつていつた。資本の相対的不足が農業諸地方にあらわれ、農業労働に対する需要が低落し、<sup>17)</sup>そうして賃銀は下落した。」

バートンによれば、農業労働の価値低下は、なによりもまず製造業との相対的關係において考えられねばならぬと



する。そこには製造品価格と農産品の大宗たる穀物価格との相対的關係および製造業労働賃銀と農業労働賃銀との相対的關係が指定されているように思われる。「諸觀察」においてはむしろ製造業、農業をひつくるめての労働需要および賃銀が問題となつてゐるのに対し、「研究」においては、その窮乏が最もさしせまつてゐる農業労働に焦点が合はされてゐる。そうしてこゝでもまたマルサスの人口理論およびそれより派生する救済策は、部分的には認められるとしても、たかだか第二義的地位をしか与えられてゐない。そうだとすれば、救済法による救済は止むをえざるものとして認められねばならなくなる。なんとならば、「諸商品の価格の一般的騰貴は、いなかの労働 (Country Labour) の賃銀騰貴によつてただちに追隨されることがつたにない」ということもまた、よく知られてゐるところである。もしこれらの救済に對してなんらの立法的措置も存在しなかつたとしたら、その間においては、大きな苦しみが貧農の全階級によつて耐え忍ばねければならない。そうしてかゝる物価騰貴が徐々に多年にわたつて増加し続けるときには、それから結果する苦しみは比例的に延期されるに違ひない」<sup>19)</sup>のであるから。

第三書「人口超過」(一八三〇年)は、その主題が比較的に局限されてゐることおよびそのページ数がやゝ少ないことによつて、上述の「研究」ならびに次にのべる「穀物法」にくらべて、小論といわれねばなるまい。<sup>20)</sup>そこではまずマルサスを思わせる接近の仕方で、人口の超過という事実が導出される。近年(一七七〇—一八二二年)における人口増加は、四五〇万人にも達し、一八三〇年までの人口増加率は、一〇年間に二〇〇万というように急激である。これに對して食料の増加は——かれはパン用の穀物 (bread-corn) の生産増加というが——はるかにそれに及ばない。こゝに人口の過度の成長ないしは人口超過の問題を生じる。人口超過の弊害は、第一に実質賃銀の低下および第二に凶作もしくは悪疫時における労働人口の減失という点にあらわれる。これの矯正策としては、次の三者が考えられるが、バートンの推奨するのは最後のものである。すなわちその第一は、マルサスの道德抑制であり、換言すれば婚姻關係を取結ぶに當つて慎重であれとなすものである。バートンは無下にこれを反對しはしないが、たゞさしせまつた災厄に對しこの様な緩慢な作用しかもたない方策に依拠しても、全く役にたゝないだろうとする。<sup>20)</sup>その第二は、農業技術の進歩によつて食糧増産を可能ならしめんとする方策であり、より具体的には、荒地を耕作することや現在の

耕作方法をスキ耕作に変更することなどである。バートンはこゝでもその必要性を否定しはしないが、しかしそれがこの問題を全く解決しようとは考えない。その第三は、バートンによつて積極的に推進される移民であり、それはかれによれば最も低廉でしかも最も有利な方策であり、その好例としてはニュー・サウス・ウェールズ (New South Wales) をあげるなど、はつきりと政府による移民奨励策に加担する。<sup>21)</sup>

われわれはこゝで当時の支配的学説であり、古典学派の通説でもあつたマルサスの人口理論とバートンの人口理論との相異点を指摘すべく、いさゝか脇道にそれることにしたい。前者によれば、賃銀の騰落は、結婚数の大小に影響を及ぼすことによつて、直接に人口の増減に結びつけられる。他方賃銀の騰落は、前述した如く、資本の増減によつて規制されるから、結局するところ、労働需要をあらわす資本と労働供給をあらわす人口とは労働の価格たる賃銀をパラメーターとして、自然率におちつくものとされた。<sup>22)</sup>これに対してバートンは、次のように反論する。第一に、賃銀の騰落が人口増減におよぼす影響は緩慢であり、人口の増加と労働供給との間には一五、六年ないし二十一年のラッグがあり、またその時期をすぎてからも賃銀騰落が労働需要に及ぼす影響は量において小さく作用において緩慢であり、賃銀による労働供給の適応はかならずしも十分でないといえる。<sup>23)</sup>第二に、人口増加もしくは結婚の奨励を直接に規制するものは、賃銀騰貴よりもむしろ雇傭機会の繁閑である。もしも物価騰貴に下まわる貨幣賃銀の騰貴すなわち実質賃銀の下落が雇傭の増加をもたらすものとすれば、人口増加に結付けらるべきは、賃銀の騰貴ではなくしてむしろ賃銀の下落でなければならぬ。<sup>24)</sup>第三にマルサスのいう如く、貧乏の減少がたゞちに人口の増加をもたらすと考えるべきではなくして、事実はその逆となるであろう。なぜならば、生活程度の向上はむしろ慎重をうみだし反対に困窮の増加が自棄に身をゆだねる結果となるであろうからとしている。<sup>25)</sup>われわれは上述したように、バートンの主なる功績をば、労働需要はかならずしも総資本によつて規定されないという異説に認めたのであつたが、同様にその半面をなす労働供給もまた賃銀率によつて一義的に規制されないという異説に、人口理論におけるかれの功績を認めたいと思う。

第四書「穀物法」(一八三三年)もバートンの他のパンフレット同じく、現存の穀物法(一八一五年制定)を撤廃

ないし修正せんとする動きが議会の内外に活発にみられるに至つた時期に、その撤廃に反対しその存続の得策なるゆえんを説明すべくかゝれたものであつた。そういう意味においてそれは、他のパンフレット同様に、きわめて時論的なものであつたといわねばならない。しかしそれはかれのパンフレット中においては、最も包括的なものであるともいえる。例えばそこでは政治経済学の定義がなされているのみならず、完全なる交換の理論の定式化さえなされんとしてゐる。もつともそこでの重点はやはり穀物法撤廃の旗印を高くかゝげる自由貿易學説の批判に指向されてゐる。そのさいかれによる設問は次の如くなされる。すなわち、穀物の自由なる輸入の結果消費者一般にとつてパンの価格がやすくなることと、さなきだに過剰な農業労働者の失業をますこととのいづれがえらばるべきかという二者撰一が問題とされる。現実に忠実なるかれはこゝで、労働移転の制限性（例えばサセツクスよりマンチエスターへの）を考慮に入れるのみならず、独立小農業者の貧民化の問題をも併せて考えにいった上で、後者に軍配をあげる。もう一步進んでいえば、かれにとつては、富または資本の蓄積がそのまゝ一國の富裕をあらわすことにはならないのである、さらにそれがいかに分配されるか尋ねられなければならない。もつとそつちよよくにいえば、資本および人口の増加はむしろ適度であるのが望ましく、それをこえれば、国民的害悪に転ずることになる。だから本當に繁榮している国はこのイギリスではなくして、スイスであるということにもなる。さらにこれらの思考の根底には、一國の繁榮の基礎的要因には新しくかつ肥沃な土地の豊富さが指定されてゐるようである。従つてかれにとつては新開地への移民は二重の意味において——それは人口過剰に悩む本国のためののみならず、植民地のためにも——有益であることになり、政府はカナダ移民を奨励すべしということになるのである。

原資料の不足から確たる典拠をあげえないけれども、「穀物法」においては、バートンの思考は著しくシスモンディに接近してきてゐるように思われる。その牧歌主義的な言辭において、<sup>20</sup> またその自由貿易學説の排撃ならびに政府による移民奨励の必要の強調などにおいて、シスモンディの「政治経済學新原理、または人口との關係での富について」二卷（初版一八一九年、第二版一八二七年）の影響を思わせるものがないでもない。だからこゝで當然におこる疑問は、バートンがシスモンディと同じく小商品の立場よりするリカブドウ体系の批判者であり、ローマン主義の流

れをくむものであつたかいかということである。われわれは以下節を改めてこの問題を考へてみることにしたい。

(9) 拙稿「バートンおよびリカアドウの機械論について」(一)―(三)「経営と経済第五八号―第六〇号を参照のこと。

そこでの筆者の力点は、第一にバートンとリカアドウの相異点を追求することおよび第二に、両者の相対的評価にもとづき少くともある点においてはリカアドウをこえるものをバートンにみんとするところにおかれた。この両者の決定的区別は、リカアドウが、機械導入に伴う労働需要の相対的減少(増加率の減少)をしき認めえなかつたのに対して、バートンがその絶対的減少(需要量の減少)をも認めんとした点に求められよう。

(10) フルネームでいえば、Report from and Evidence taken before the Select Committee of the House of Commons on the Poor Laws, 1817. であり、一八一七年七月四日に提出され、ふづうにはその委員長の名を冠して Report of Sturges Bourne's Committee と称せられているものである。

(11) 支配的学説によれば、資本(富)増加↓労働需要増加↓賃銀増加↓人口増加という連関が認められるので、資本増加が結局において人口増加を規制することになる。なおこの部分のくわしい説明については、前掲註9における拙稿「(一)」「二」「三」ページを参照されたい。

(12) Observations, PP. 15—7. (Hollander's reprint, PP. 16—8)。なおこの部分のくわしい説明については、拙稿「(一)」「二」「三」二六ページを参照のこと

(13) たとえばレーデラーは E. Lederer: Technischer Fortschritt und Arbeitslosigkeit, Tübingen 1931. Vorwort, P. V. Note. 高山洋吉訳「技術経済学、上巻」一二ページにおいて、「バートン、リカアドウおよびマルクスは―古きものの最も重要なものだけをあげれば―技術的進歩の作用を同様にみている。しかしこの研究は、近代理論の問題提起より出発し、これが最初に作り上げたところの思考的補助手段を用いる。」となし、直接の継承関係を否定するけれども、指向においては同じものをねらっているといわれなければならない。ちなみに邦訳においては、戦時中のためかマルクスの名前は削られている。

ナイサーもまた、H. Neisser: 'Permanent' technological unemployment, American Economic Review, March 1942. I. Introduction, P. 50 において、この問題の発端をリカアドウの「機械論」にもとめてゐる(ただしバートンの名前はあがつていないけれども)。

(14) シティロフは、上掲論文の IV (PP. 90-96) において「諸觀察」、「研究」および「人口超過」を、V (PP. 90-99.) において「穀物法」を、IV (PP. 99-100) において「死亡率」および「一八四七年の貨幣恐慌」をそれぞれ取上げている。

(15) G. Soliroff: *ibid.* P. 99. たゞし「一八四七年の貨幣恐慌」は、かれの恐慌観を伺うには重要なものであるかもしれない。

(16) 「諸觀察」第三部でもみられるように、バートンによれば救済法は賃銀低下の原因ではなくして、その結果なのであった。なおこの点に關する説明については、拙稿「(二)」、「一三三ページを参照のこと」。

(17) G. Soliroff: *ibid.* PP. 92-93.

(18) J. R. McCulloch: *The Literature of Political Economy, etc.* P. 287. ようして「研究」におけるバートンの言葉の孫引。

なおマカロツクの上掲部分は、「研究」に対するリカフドウ側よりの反批判の典型をなすものである。上掲註5をも参照のこと。

(19) この意味において、マカロツク以来の、バートン文獻を三つに止めるという慣習はある程度正当視される。なお前掲註1におけるテッダーの取扱いおよび註5におけるマカロツクの取扱いを参照のこと。

(20) この点についてのより立入った説明には後掲註23の引用部分を参照のこと。

(21) 「諸觀察」における移民の奨励については、拙稿「(二)」一四二ページを参照のこと。

(22) この考え方のゆきつくしたものとしては、J. S. ミルの賃銀基金説 (*Wages fund theory*) があげられる。なおこれに対する批判としては、拙稿「(三)」三九一四〇二ページを参照のこと。

(23) *Observations*, PP. 20-21. (Hollander's reprint, PP. 20-21) その説明としては、拙稿「(一)」二七二八ページを参照のこと。

(24) 「諸觀察」第二部の議論は別してそうである。拙稿「(一)」二九一三二ページを参照のこと。

(25) *Excess of population*, PP. 39-40. (たゞし G. Soliroff: *ibid.* P. 98. による)

(26) たとえば、*Corn Laws*, P. 99. における「かゝる人民〔スイスの人民〕は、商業投機の白熱的できわどい追求よりもかれらの祖先たちよりかれらに移譲された財産の静かな享受の方をえらぶことであらう。適度の生活能力 (*competence*) において幸福であるが、しかし富裕をば熟知していない」という発言をみよ。(たゞし G. Soliroff: *ibid.* P. 99. による。)

## IV

以上不十分ながら、かれの名著「諸觀察」のみならず、他の三書にもわたつてバートンの學說を吟味してきた。しからばバートンは、基本的にはいかなる立場にたつものであるうか？ ソテイロフは、「ジョン・バートンの諸見解の獨創性は、かれをば熟知のイデオロギー的諸範疇のどれか一つに分類することをむしろ困難ならしめる」といつてこの問題を回避しているけれども、どちらかといえばバートンの立場をばシスモンデイと同じく、ローマン主義もしくは小ブルジョア主義においているように受取れないでもない。ソテイロフは、上述の引用にすぐ續けて次のようにもいう。すなわち「リカパドウ的自由貿易學說およびその人口學的平面におけるマルサスの補完物に対するかれの洞察ある批判によつて、救貧法についてのかれの弁護によつて、穀物法撤廢に対するかれの反対によつて、また公共の支出による移民ならびにその定着に賛成するかれの申立によつて、かれが經濟過程の公共の規制に対する決定的賛成者であり、また財富 (Mammon) の正當化および榮光化に対する決定的反對者であることを、かれは示した。」<sup>20)</sup>という。

われわれのこれに対する設問は、次の如く二重である。第一に、バートンははたしてシスモンデイ的ローマン主義および小ブルジョア主義に属するのかということと、第二に、たとえ第一の設問が肯定的に答えられたとしても、バートンはシスモンデイと何処が違ふかということである。第一の問題については、それを肯定するような発言がみられたし(殊に「穀物論」について著しい)、バートンとシスモンデイの間に共感をよぶものが存在することを否定もしないが、<sup>20)</sup>最終的の回答を原典の精読まで留保したい氣持である。第二の点についても、シスモンデイの長所を認めるにやぶさかではないが、バートンに對比された場合かれの理論のアイマイさを掩いかくすることができない。なるほどシスモンデイは、その資本主義批判において直觀的正しさを示しえなし、またその「機械論」においては固定資本の増大に伴う労働需要の減少にきがかないわけではなかつた。しかしマルクスもいう如く、「シスモンデイは資本と收入との關係について特殊な関心をもち、また實際この關係についての特殊的把握をかれの「新原理」の特徵的区

別たらしめてゐるのであるが、そのシスモンディは一言の科学的言葉を述べておらず、微塵も問題の解明に寄与してゐない」のである。これに反してバートンは、他のラムジイ、シエルビリエ (A. E. Cherbuliez) などと共に資本に関するシスミ的 (古典学派的) 理解をこえて進まんとしたし、事実いくらかの前むきの進展をなしたといえよう。もつともバートンも、他の人たちと同じく、流動資本を可変資本と、固定資本を不変資本と取違へることによつて成功はしなかつた。しかしそれはマルクスによつて前むきに受取られ、マルクスの産業予備軍の理論に結実していつた。よつて結論としてわれわれは、次の如くいわねばならない。すなわち、マルクスの産業予備軍の理論の源泉となつたものは、やはりシスモンディの「機械論」ではなくして、バートンのそれであつたと。そして筆者はこゝにバートンのシスモンディに対する決定的優位をみんとするものである。

(27) G. Sottroff: *ibid.* P. 101.

(28) *ibid.* P. 101

(29) シスモンディもまた「バートンの「諸觀察」および「研究」の二書について *Annales de législation et d'économie politique*, Nov. 1892 に於いて、好意ある書評をなしてゐたのである。 (cf. G. Sottroff: *ibid.* P. 95)

(30) K. Marx: *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Volksausgabe besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut*. Bd. II. Moskau 1933. Ab. III. Die Reproduktion und Zirkulation des gesellschaftlichen Gesamtkapitals. Kap. 19. Frühere Darstellung des Gegenstandes. III. Die Späteren. S. 394. 長谷部文雄訳「資本論七」(日評版)七九ページ。なお傍点はマルクスのものである。

(一九五三、六、一五)